

今月の特集は「ひとり職場の運営」である。多分、職場の規模や就労体制からして、やむなくひとり職場で働かざるを得ない状況もあると思われる。しかし、休暇を取るとか、研修会への参加、相談相手などにおいて不都合なことも多々あると思える。それでも、そのような苦境を超越して、ひとりで出来る仕事範囲を拡大し、役割を果たすことも不可能ではない。1995年のデータによれば、日本理学療法士協会の会員が勤務する総施設(4,338)の42%はひとり職場である。よって、それらの職場に勤務する理学療法士の活動水準は我が国の理学療法の発展に多大な影響を及ぼすことになる。

■すべては自分への帰結(佐藤卓己論文)

ひとりの理学療法士として、理学療法の価値、有効性を患者や他の職種に知ってもらいたかった。それを通じて剥き出しになっている理学療法士としての自分を試したかった。

■ひとり職場の現状と工夫(田附満論文)

業務負担を補うためにパソコンを使って患者のデータベース化を図っている。リハ科のスタッフの教育や職場外の勉強会に参加して自己研鑽を怠らない。

■ひとり職場 24 年(田中耕作論文)

故郷に貢献したく、ひとり職場に飛び込んで24年が経過した。そのデメリットも多いが職場で“ただの一人”にならないように肝に命じながら、メリットを活かして仕事を展開してきた。しかも佐賀県理学療法士会の会長も務めるなど、業務外の活動にも意欲的であった。

■健康教育の専門家を目指して(徳村哲論文)

3年間だけ保健所という公衆衛生学園に入学してみようと思ったが、10年経過した現在でも卒業できないでいる。しかし、理学療法の枠を越えて、健康教育の専門家であることを目指してきた。

■老健奮闘記(中野佳子論文)

卒業後、病院勤務1年間で何も知らない老健に飛び込む。老健施設での基本課題の1つである他職員とのチームアプローチを大切に、職員や家族の研修にも力をいれてきた。

■コミュニケーションで創る仕事(長森誠二論文)

人口3,600人の小さな町で患者さんを死ぬまで責任をもって診てみたい。自分の口下手を克服して意思疎通の開発が仕事を展開する契機となった。

■“ケア”主体の老健施設の理学療法士として(西森善一論文)

職員全員で多岐に及ぶケアを主体として入所者に対応するために、理学療法士としての力量を発揮することに役割を見いだしている。

■白衣を脱いだPT—行政組織で期待されるもの—(早川好子論文)

やたら長い所属名で、その業務も知らずに勤務した。それでも「石の上にも三年」やっと全体が観えてきた。そしてすべての仕事はどこかでつながっていることも。

■病院から福祉施設に移って(牧田光代論文)

福祉と医療との間にある谷間。そこには長年築かれたバリアがある。そのバリアを取り除き、障害発生初期からその終末までの連続性を完遂させる一助として機能したい。